東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター

Department of Practical Religious Studies
Graduate School of Arts and Letters
Tohoku University

第16号　2021年5月1日

目次

履修証明プログラム2020年度の報告.....7頁
臨床宗教教養講座（第4期）
臨床宗教実践講座（第3期）
臨床宗教実践講座修了者の感想 8-14頁
各地の臨床宗教師会の動向 15-19頁
実践宗教学寄附講座活動報告 19頁

金田諦應さんインタビュー
臨床宗教師の原点を問う.....2-6頁

東日本大震災から10年目の節目を迎えた。震災の翌年に、まずは三年間ということでスタートした実践宗教学寄附講座も10年目に入るわけである。その間、震災以前には存在しなかった「臨床宗教師」という言葉は、すっかり人口に膾炙したとまでは言えないまでも、宗教界や緩和ケアの領域ではかなり知られるようになった。臨床宗教師研修が他大学機関でも採用されるようになり、各地の臨床宗教師会に続いて、2016年には日本臨床宗教師会が発足した。2018年から資格認定制度が始まり、認定臨床宗教師は200名を超えた。ここまでの歩みは、順調すぎるほど順調であったと言える。

ここに出来したのがコロナ・ウィルスによるパンデミックである。対人接触が大幅に制限されるようになった結果、臨床宗教師の主たる活動場所である病院、介護・福祉施設等での傾聴活動は一斉にストップした。このことによって、実習場所を失った各地の養成プログラムは目詰まりを起こし、多くのプログラムは2020年度の実施が見送られた。幸い、東北大学では、受講者が各地で実習先を開拓するシステムに移行していたので、（各受講者の苦労は並大抵のものではなかったようであるが）なんとか例年通りに臨床宗教実践講座を進めることができた。また、臨床宗教教養講座も、もともとインターネット授業がメインで行われていたために、対面でのスクーリングが実施できなかったのは大変残念なことであったが、多少の混乱を伴いつつも平常運転で行うことができた。

今後、ワクチン接種が進むことになり、その影響がどのようなものになるのかは予断を許さないのであるが、感染症への配慮が人々の心の中に浸透し、リモートでのコミュニケーションへの抵抗感が薄れた結果、ケアの現場の風景が変わっていくことは間違いないことであろう。新しい時代に適合したいスタイルを身に付けていくことが必要であるが、同時に、臨床宗教師の原点をあらためて見直す機会としなければならない。引き続き、皆様のご指導とご理解を賜るようお願いする次第である。

2021年5月　実践宗教学寄附講座

インタビュー

金田諦應さん

臨床宗教師の原点を問い直す
—東日本大震災後十年の節目に—

東日本大震災から10年という節目を迎えた今年、3月9日には南三陸町で宗教者有志による追悼行脚が行われ、3月11日には石巻市の復興公営住宅集会所にてカフェ・デ・モンクが開かれました（記事内写真）。

4月24日、栗原市曹洞宗通大寺に金田諦應さんを訪問し、十年間の歩みを振り返っていただき、現在の地点から考えていることを語っていただきました。

（聞き手・構成 高橋原）

■仏典をひもといて

——2018年と今年、二冊の本を出されました。

『傾聴のコツ』（三笠書房2018）は誰でも手軽に読めるようなものとして、ライターさんとの質疑応答を通して執筆しました。もちろん被災地での体験が裏にありますが、そこに多く触れ過ぎると内容が重くなってしまいますので、体験から導き出されたエッセンスの様なものを散りばめたつもりです。

私の活動の原点は三つの出来事です。一つは震災の夜に見た星空。地上の惨劇を包み込む満天の星空に宇宙の彼方からの暖かい視点を感じました。二つ目は四十九日追悼行脚で立った破壊された海岸。そこではいままで宗教者として身に付けてきた宗教言語が崩壊してしまい、なにを道標に歩いたらいいのだろうと途方に暮れている自分がいました。三つ目は、一周忌追悼行脚で、四十九日の時と同じ海岸に立ったのですが、漂う磯の香の中に再生の風を感じた時、私たちの生死を更に包み込む大きな命を感じました。それが活動の原点です。

私は、震災以前は自死問題に取り組んでいました。心理学等の心の領域の学問を勉強したわけではないんですが、自死念慮者と現場で向き合いながら、迷った時に仏典やユング心理学・フランクル等の本を読み、碩学の智慧を頼りに現場と格闘していたと思います。

震災の時もそのような歩き方をしておりました。特に発災から最初の1、2年の間は仏典しか読めなかったですね。最初はスッタニパータとかダンマパダ等の原始経典、後には龍樹（ナーガールジュナ）の中論、世親の唯識、そして次第に西田哲学やニーチェの実存哲学・フッサールの現象学等の西洋哲学も読み直して、現場での出来事と戦わせていましたね。今考えると、かつては抽象的・形而上学的で現実と乖離したような教理・論説も、この震災での出来事を自分の中に織り込んでいく時にとても役にたったような気がします。

——僧侶として相手にどんな言葉を語るかというような、参考資料としてですか？

いいえ、この世界をどのように認識するか、この世界に向き合う自己とは何者か、総じて言えば真理の全体像に関する事です。龍樹からはとても深い視点を学びました。龍樹は真諦（しんたい）と俗諦（ぞくたい）を立てて世界と自己、そして二つの関わりを説明しています。俗諦というのは現実に私たちが苦しんだり泣いたりしている世界のこと。津波が来てあらゆるものを破壊する世界の真実。そこでは人々は嘆き悲しむ世界。そしてそれは自分の「我」が投影された世界。しかし、一方でその出来事を包みこむ真諦からの視点がある。

四十九日の時、私たちは破壊された海を見て慟哭しました。しかし、一年後、同じ海には磯の香が漂い、海は再生へと向かっていた。実は海は破壊された直後、間髪を入れずに再生を始めていたんです。世界は破壊と再生の繰り返しの中で出来事として立ち上がり続けていたのです。これが、ナーガールジュナの言う真諦からの視点なんだという事に気づいたんですね。

真諦が上で俗諦が下という事ではない、どちらも真理です。俗諦からは慈悲や愛という感情が生まれます。しかし、それだけでは厳しい場所を歩き続けることは出来ないんです。それを更に上から観察する真諦という視点が必要なんですね。真諦と俗諦は互いに循環しながら人格の上に現成していく。それが大乗仏教の「菩薩」の立ち位置だと思います。

仏典を片手に迷いながら歩いた一年でしたが、再生の風の中に初めて仏の言葉を見つけたような気がしましたね。

――それって、悟りに近づいたということなのでは？

私にとってあの体験は悟りであり、また救いであったと思います。般若心経の有名なフレーズ「色即是空、空即是色」とはこのような世界なのかと、一瞬真理に触れたような感覚がありました。しかし、人間存在は諸行無常、諸法無我で、その気づきは絶え間なく変化していくんです。だから、あの時の感覚は決して忘れないように常に心に思い起こし、そして問い続けております。真理は一瞬の煌めきの中に姿を現して瞬く間に消えていきます。大切なのは常に問い続ける事、求め続ける事なのだと思いますね。

あらゆる宗教は理想郷を「仏国土」「お浄土」「神の国」などと表現しますね。被災地の泥の中を歩き廻って１０年が経過しました。そこには想像も出来ない程の苦悩を背負った人々がいました。と同時に、人が再び立ち上がっていく時の神々しい姿や、それを支えている沢山の人々の愛と慈しみの姿も見る事が出来ました。地震津波で破壊された海も、潮の香りと共に再生を続けています。理想郷は遥か遠くにあるのではなく、まさにその様な出来事が生起する場所がそうなのではないか、今はそう思っています。

ただ、心残りがあります。それは、せっかくカフェデモンクに来て頂いてもお話を聴くことが出来なかった人が大勢いたことなんです。人間には限界があります。「私の話を聴いてほしい」とう熱い視線を感じても、応えられず帰って来たことが何度もありましたね。一期一会という言葉通り、次に行った時にはもうそこにはいないんです。「どうかいい人に出会い、支えられて、よき人生を送って欲しい」これが私にとっての祈りの言葉です。

人が立ち上がるには大勢の人の支えが必要です。特別な呪文や魔法の杖はないんです。私たちも大勢の中の一人。花が咲く為には、水、光、栄養、温度など様々な条件が必要です。そして絶妙なタイミング「因縁時節」「時節因縁」が重なったときに花は咲くのだと思います。そしてそこに仏国土・極楽浄土・神の国が開いていくのだと思いますね。

■思わずため息

2019年3月、石巻市大橋仮設団地で、仮設住宅最後のカフェデモンクを開きました。ここは最盛期には600戸あって、様々な人々が肩を寄せ合って暮らしていました。カフェデモンクも幾度か開催し、また、東北大学実践宗教学の実習場所でお世話になりました。住人さんとはすっかり馴染みになっておりました。自治会長さんの山崎さんは常に凛とした態度でこの団地をまとめておりましたが、この時は私と目が合った瞬間、どちらからともなく大きなため息をつき、互いにしばらくの沈黙。溜息と沈黙の中に、様々な想いが込められている事を二人には分かっていました。いつものマッサージを受けてもらいましたが、気持ちよさそうに涎をたらしながら横たわっている姿はまるで「涎をたらしたお地蔵様」でしたね。しかしとても神々しい輝きを放っていましたね。この時は「ケアする者」「ケアされる者」の関係を遥かに超えた次元で繋がっている事を感じました。

活動から三年目の12月、次第に日の光が失われ暗闇が多くなる季節に、身も心もすっかりすり減って軽い鬱状態になりました。本当に辛い時期でした。一周忌の行脚で再生の風を浴びた時、突然真理が落ちてきたような感覚を覚えた自分でしたが、やはりどこか自分の力で活動していたんですね。暫く活動を休止して、一日おきに温泉に行ったり、一日中ボーッと映画を見たりしているうちに、やがて春彼岸が近くなって再び光が戻ってくると、不思議なことにまた力が漲るって来るじゃないですか。そしてまた被災地を歩き始めている自分がいました。一体この力はどこから来るのだろうか・・・まるで大きな力に誘われ、もよおされている感覚でしたね。

その時思い出したのが、ラジオカフェデモンクに出演頂いた日野原重明先生の言葉でした。収録が終わった後の雑談で、「先生の手帳には120歳までの予定が書きこまれていると伺っています。そんなに働いてお疲れになりませんか」とお聞きしたら、しばらくの沈黙が続いた後で、「仕事を自分の仕事にしていたら疲れますが、私の仕事は神様から与えられた仕事・使命なんです。そう考えると疲れないのですよ」とにっこりと笑って答えて下さった。

本当に不思議なもので、太陽の光が戻ってくると、自分もまた復活してくる。今までは、自分が自分がと思っていたんだけど、なんか大きな力に動かされていたんだな、という感覚が沸き起こりました。その時に気づいたのは慈悲には「自力の慈悲」と「他力の慈悲」の二つがあって、それには上下・優劣があるのではなく、二つの違う方向の慈悲が時々ぶつかり合って葛藤し始め、そしてその葛藤が宗教者を育んでいったり、活動の原動力になるのだと思いました。

■『東日本大震災—3.11生と死のはざまで』（春秋社2021）について

とあるシンポジウムの折、春秋社さんから「いつも講演を拝聴しているけど、まだまだ言い足りないことがあるのではないですか。そろそろ本を出版しませんか」とお誘いを受けました。確かに、私が体験したことは1時間や2時間では到底語りつくすことが出来ないと、講演の後はいつも不完全燃焼の想いを残していました。ちょうど震災から8年が過ぎようとしていた時期です。人々は仮設住宅からほとんど復興住宅に転居が完了し、私達の活動もひと段落というタイミングでした。

瓦礫の中から始まった活動は、避難所・仮設住宅を経て復興住宅まで辿り着きました。その間、被災された方々は私たちの存在を苦にもせず、あてにもしないでその傍らに置いて下さいました。苦悩の姿やそこから立ち上がってくる時の神々しい姿を見ることを許された者として、その様子を、世界や後世の人々に伝える事は、私たちの使命であると考え承諾しました。

幸いにも、活動日記と、多くの写真を撮っておりました。不思議なことに写真を見ると瞬く間にその時の会話が蘇ってくるんです。天から落ちてきたような言葉が、キーボードを通して打ち込まれているという感覚でしたね。

書き始めたのは令和2年1月末辺りからです。ちょうどその頃から91歳になる父の命が少しずつ下降線を辿り始めていました。看病と介護をしながらパソコンに向き合っていました。誤嚥性肺炎の為に入院してからは、父の病室で書いておりました。父の微かな息遣いとキーボードを叩く音が病室に響き、なんとも言えない神秘的な時間が流れておりました。本の後書きを書き終えた辺りからいよいよ呼吸が浅くなり、最後まで頭脳明晰なまま父は旅立っていきました。

——お父さんは夢に出てきたりしますか？

全然出てきませんね。しかし、毎朝遺影の前に線香を捧げるのですが、「諦應、線香はまっすぐ立てるんだぞ」という声はなんとなく聞こえてきますね。（笑）

父は、活動には一切口出さなかったですけど、お寺の仕事とボランティアは両立させないとダメだということだけはよく言われましたね。カフェ・デ・モンクには滅多に顔を出しませんでしたが、「おまえ達はよく行くな。俺はあんな悲しくて辛い場所には行けないよ」と言っていたのを思い出します。父は住職を引退すると海外布教に出ることが多くなりました。特にオーストラリアの禅コミュニティに深く関わっておりました。実は、カフェデモンクの最初の資金はこのコミュニティからの支援金でした。そういう流れを引き寄せたという意味で大きな存在だったと感じます。

東北に住まう宗教者にとって地震・津波は程度差こそあれ、度々経験しています。私の祖父（先々代住職）は三陸大海嘯（明治29年）と昭和8年の三陸大津波を経験しております。特にその時には被害にあった海岸を巡回布教した事を父から聞いています。明治の頃からお寺が肉系相続を許されるようになって、父から子へ子から孫へと厳しい自然に生きる宗教者のDNAが継承されている様に感じます。

——本の評判についてはどうですか？

三大新聞や共同通信、仏教系の新聞に書評がいくつか出ましたがけど、我が意を得たり、というのは読売新聞に出た書評でした（3月7日、評者：中島隆博・哲学者、東大教授）。私はこの本の中であえて道元のことは書かなかったんです。しかし道元の「牆壁瓦礫(しょうへきがりゃく)」「世界崩壊（ほうえ）」というキーワードを引きながら作品を読み込んで頂き、本の中に流れる宗祖道元のスピリッツを見抜いてくれていました。

——道元さんは「傾聴のコツ」は説いていないんですか。やっぱり坐禅だけ？

傾聴は他者への暖かい眼差しが基礎にあります。同じく坐禅や瞑想・祈りにもこの視線が重要で、これがないと全く意味がないし、自己満足以外のなにものでもない、むしろケアを阻害するものだと思いますね。近年様々な種類の瞑想が試みられていますが、その動機が重要で、心の安定・不安・ストレス解消等と個々人の問題に発する動機だとそれは目的達成のためのただの道具になってしまう。坐禅・瞑想・祈りはそもそも目的達成の為にあるのではなく、もっと深いところで私達の存在と世界の有様を支えるものだと思います。スピリチュアルケアは、ある状態・ある目的を想定し、そこに誘うテクニカルなケアではなく、「無所得・無所悟」のケアであり、「三輪空寂」のケアが理想だと思います。

花、心無くして蝶を招き　蝶、心無くして花を尋ぬ
花開くとき　蝶来たり　蝶来たるとき　花開く
吾もまた　人を知らず　人もまた　吾を知らず
知らずして　帝の則に従う

良寛さんの漢詩です。理想的なケアの有様だと思います。

道元禅師と師匠である如浄禅師との邂逅は「身心脱落」という境涯でクライマックスを迎えます。これは傾聴する者と傾聴されるものが一つになるあの瞬間に通じ

ることだと思います。あなたと私がかぎりなくシンクロする「自他不二」の瞬間があります。おそらく、ケアを実践する方なら同じ様な経験があると思います。

傾聴の現場では何もできない事が多く、グラグラと揺れ動き、逃げ出したくなる事がよくありましたね。慈しみの心を持ち続け、その場に居続けるためには、天と地を貫く座標軸を持っていないと自分自身がダメになってしまう。私は活動をしながら道元禅の「只管打坐」をその様に捉えました。大悲・大慈の禅。カフェデモンクの傾聴空間は被災地に建つ禅堂だったと思います。

もちろん道元禅師だけでなく、親鸞上人のご著書も随分読みました。それから山浦玄嗣さんの「ケセン語の聖書」。私は活動3年目の冬に鬱状態に入りました。しかし翌年の春、光が再び戻ってくると、すっかり力みが消え、何かにもよおされる様に復活した自分がいました。一瞬でしたが、これが何か大きな力で動かされるという事かと気づきました。「自力」と「他力」は紙一重、あるいは表裏一体で、この矛盾する力を通して宗教者は問い続け、そして深まっていくのでしょうね。

■臨床宗教師に必要な力—養成の課題

——震災から10年、臨床宗教師養成が始まって9年になって「震災」「被災地」というインパクトが薄れてきているように思います。

インパクトが薄れていくことは日本臨床宗教師会発足当時から織り込み済みでした。制度化するという事はそういう事なんですね。発足式の挨拶で「組織を作り、多くの立場の宗教者が集まってくる事は大変喜ばしい事。しかし、それは同時に原点を見失ってしまう事と裏腹の関係にある。その時は再び四十九日で立ったあの海岸に立とうではないか」と語り掛けました。あの時の海岸では、宗教者が纏っていたあらゆるものが削ぎ落されました。私たちは何も出来ないという現実を突きつけられたんです。あの現実の前で削ぎ落され、そして泥の中を這いずり回って、一つ一つ拾い集めて歩き続けたんです。これが間違いなく臨床宗教師の原点です。

様々な想いで臨床宗教師について学んでいると思いますが、臨床宗教師の学びは、積み上げたものを、削ぎ落し、削ぎ落されることだと思います。それでもそこに立っていられる底力のある宗教者を育てる事、これが養成の最終目標だと考えます。

震災から10年が経過しました。3月に行った10周年追悼行脚では10年前と同じ場所を歩きました。しかし、あの時立った海岸には巨大な防潮堤が建設されており、その上から海に向かって祈りを捧げました。海は回復し続け、人々の生活も平穏を取り戻しつつあります。それでも、これから学ぶ方達にあの時の出来事を語り続けたいですね。「宗教者と自然」私たちは常に自然から覚悟を問われ続けているんです。

また、臨床宗教師はこの文明の有様を問い続けなければならないと思います。この文明から零れ落ちる苦悩の言葉に敏感に反応しなければならないと思います。私の場合は、震災以前から自殺防止活動で電話相談を行っていました。自殺の問題は現代社会のあらゆるシステムと深く絡んでいます。昨今の感染症の問題、文明のシステムを支えるエネルギーの問題、生と死を巡る問題、環境問題等、私たちが問いを深くすれば、そこに苦悩している人々の姿が鮮明に浮き上がってきます。そういう意味で、臨床宗教師は文明を問い続ける力が求められます。臨床宗教師の活動フィールドは常に眼前に開かれているんだと思いますよ。

——そういう力はどこで養われるものなんですか？

私には大上段に振りかぶって文明論を展開する能力はありませんが、様々な矛盾、生きにくさは私達の日常生活の中に顕れると思います。だから、宗教者も一生活者として日常の中から問題を見つけ、深く問い続ける感性を養うのが一番でしょうね。禅語でいう「脚下照顧」ですね。私の場合、お寺の住職として檀家とのお付き合いの中で（時にはバトルの中で）多くの事を学び、知識とバランス感覚を身に着けてきました。ですから養成機関のプログラムを学ぶことと合わせて、自分が関わっていくベースエリアを持つのが望ましいと思います。また、養成機関の教育者はベースエリアとアカデミズム、どっちにも軸足を置いている人が教育し・助言していくのが理想だと思います。

喜ばしいことなんですが、現在多くの優秀で志の高い方々がプログラムを受講されております。知識を吸収し互いに刺激し合い、そして使命感に後押しされ、すぐに何かを始めたがる方が見受けられます。しかし、やはり現場で実際に悪戦苦闘している人と関わりながら少しずつ活動していくのが大切だと思いますね。いきなりホームランを狙わず、バントヒットを重ねていくことが望ましいですね（笑）

臨床宗教師のプログラムの中で大きな欠陥があるとしたら、養成プログラムを修了した後、実際に活動する施設とか現場で伴走・指導してくれる人が少ないことだと思います。机上の学問は大切です。しかし、現場は学んだ知識が壊れ、もう一度組み立て直していく

場所だと思うんです。例えばベテランのチャプレンや、現場に何年も入っている臨床宗教師などに預けるということが出来れば、現場から鍛えられていくと思います。教育しっぱなしはとても危険です。ベテランの伴走者がいて、適切に助言をしながら熟成させていくこと、養成機関と現場の助言者がいい関係を作る事が今後の課題だと思います。

また、臨床宗教師の資格者は、それぞれ所属する教団の継続教育をきちんと受ける事が肝要だと思います。例えば曹洞宗だと僧侶に対する現職教育を年2回程行っており、これは義務化されております。その中には時代に即した人権学習が必修となっております。臨床宗教師を日本の宗教界に実装させる為には教団との良好な関係が求められます。

臨床宗教師は高度に成熟した宗教者だと思います。ですから、臨床宗教師の前に真摯な宗教者である事が肝要ですね。仮に、臨床宗教師になるために僧侶等の資格を取得する人がいるとすれば、それは言語道断、私としては到底受け入れられない事です。

――活動にはお金が要るという面があるが・・・

最近、相談活動を通して金銭の授受をしてもいいのではという議論がありますが、私としては原則反対ですね。私の基本はお寺での仕事です。そこから得られる収入の大半は寺院維持と寺院・布教活動に充てられます。カフェデモンク等の傾聴活動は支援金や寺院経済を圧迫しない程度の支出範囲で行っております。ですから九割は住職の仕事、後の一割がボランティア活動に充てられます。時間的にも経済的にも余裕がなくなったら休止するという事を自分の原則にしております。

臨床宗教師の活動は原則的に多職種協働です。常識の範囲でなんらかの報酬が発生することはあり得ると思います。しかし、例えばご自坊・教会などで相談業務をして相談料としてお金を受け取るというのはとても違和感があり反対です。ましてや相談所を設けてなどは論外です。臨床宗教師の働きは精神科の治療や臨床心理士のカウンセリングとは全く異質だと思います。

臨床宗教師の存在が、今以上に社会や教団に認知された時、各教団や民間のファンドからお金を集め、例えば「臨床宗教師活動基金」のようなファンドを作って、そこからお金を拠出して活動を支えるというのが理想であり、今後の課題なのでしょうね。

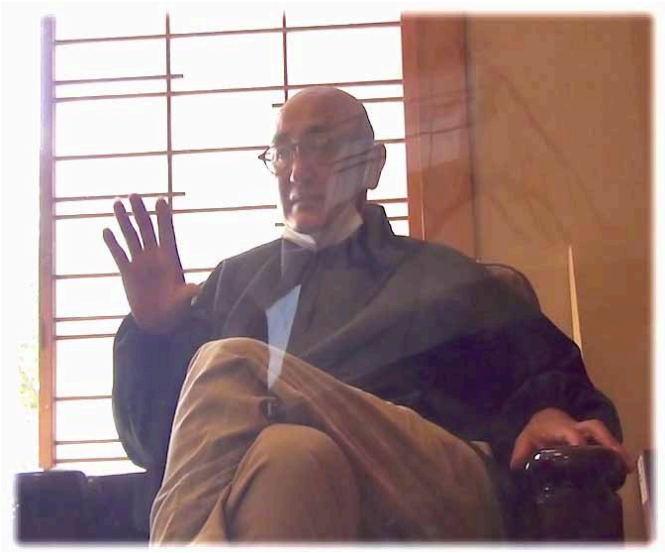
――現状、副住職がいちばん活動しやすくて、彼らが住職になったら引退しなければならなくなったりします。

活動している場所や施設の性質にもよると思います。理想論ですが、一つの現場に複数の臨床宗教師が関り、継続の循環を作るのがいいかもしれませんね。その場合その施設に臨床宗教師の役割がしっかり定着している事が前提になると思います。

臨床宗教師は活動場所を見つける能力も必要です。また、住職・副住職それぞれの立場に応じた活動を創造していくのも、かえって活動が単調にならなくていいのかもしれませんね。

――最後に、臨床宗教師のみなさんにメッセージをお願いします。

臨床宗教師は、決してキラキラ輝いているようなものではありません。荒れた大地に吹く無色透明の風のようなもので、過度な使命感に燃えたり、結果を求めたりしない事。時にそれは自身を壊し、他人を傷つけてしまう危険があります。公共空間で活動するという事は繊細な配慮が必要です。その時その時に感じ取ってその都度対応できるような「創造的倫理観」を持つ事。自分が拠って立つ宗教に誠実に向き合い、学ぶ事。そして、普段宗教者として関わっている方々を大切に、その人々から学ぶ事。そこが宗教者を一番成熟させ鍛えていく現場です。自身の中で現場と信仰を対峙させ、常に問い続ける事。時に学び、時に削ぎ落すことを恐れない事。苦悩の現場を感じ取る感性を養う事。そして、何より大切にして欲しいことは、他者への暖かい眼差しを大切にする事です。以上。



※このインタビューはアクリル板のついたて越しに行われました。

2020年度履修証明プログラム報告

臨床宗教教養講座（第4期）

受講者（＝修了者）：17名（男女比 8:9）
宗教者10名、医療従事者等8名（重複あり）
開講科目（インターネット授業：各90分×10コマ）
【前期】宗教学死生学入門（鈴木岩弓・高橋原：60分）、宗教学I（木村敏明）、宗教学II（高橋原）、死生学I（大村哲夫）、実践宗教学I（谷山洋三）スクーリング
【後期】、宗教心理学（高橋原）、　実践宗教学I（谷山洋三）、実践宗教学II（オムニバス）、応用死生学I（大村哲夫）、応用死生学II（谷山洋三）、スクーリング

臨床宗教教養講座はインターネットによる通信講座ですが、2020年度は120名以上の応募者から受講者が選抜されました。例年よりも宗教者の割合、男性の割合がそれぞれやや少なめでした。今年度新たに、「宗教学死生学入門」として、鈴木岩弓先生が公開講座MOOCで担当された”Memento Mori”の動画を利用した授業を行いました。

コロナウィルス流行の影響として、まず、東北大学インターネットスクール(ISTU)のシステムの負荷が大きくなり、授業は５月からGoogle　Classroomに移行せざるを得ませんでした。教員・受講者とも大混乱でしたが、なんとか乗り切りました。また、例年東北大学文学部で行われているゲスト講師（臨床宗教師等）を招いてのオムニバス授業を実施することができず、前年授業の録画教材を使用しました。

もっとも影響が大きかったのは8月と2月のスクーリングで、受講者全員が仙台に集って学び、飲み、かつ笑うということができませんでした。ギリギリまで迷いましたが、結局、ロールプレイ等も含め、オンラインでの開催となりました（下記写真）。初めての経験で、満点というわけにはいきませんでしたが、まずまず充実したものになったかと思います。

2020年度受講者のうち、12名（宗教者8名）の方が、2021年度の臨床宗教実践講座（第4期）へ進むことになりました。

臨床宗教実践講座（第3期）

受講者（＝修了者）：16名*（男女比 10:6）　*見込み
宗教者9名、医療・福祉関係者7名
実習：120時間　講義：10時間　グループワーク：40時間

臨床宗教実践講座は、医療福祉施設での実習と、その後のスクーリング（合宿形式）における会話記録検討を繰り返すプログラムであることから、コロナウィルス流行に大きく影響されることになりました。本講座の実習先は、受講者自らが開拓した施設でしたが、多くの施設で家族の面会さえも制限されているという状況の中で、予定通り実習を行なうことができないというケースが相次ぎました。

実習とともに、対面でのスクーリングの実施も困難になり、結局、5月、6月、7月はオンラインで実施、実習に入れた人のみ会話記録検討を行うという変則的な進行となりました。ことによると一度も対面しないまま終わってしまうのではないかという危機感のもと、情勢が安定していた10月、11月、12月は、茂庭荘での合宿を行うことができました。マスク着用、宿泊は個室、全員での東日本大震災被災地の追悼巡礼はなくし、オンライン受講も認めるなど、例年とは異なる雰囲気の中で、ほとんどの受講者が、なんとか1月までにプログラムを修了することができました。

5月 11日　　スクーリング（オンライン）
6月　8日　　一部受講者会話記録検討（オンライン）
7月6-7日　　スクーリング（オンライン）
10月12-13日 合宿（オンライン併用）
11月16-17日 合宿（オンライン併用）
12月7-8日　　合宿（オンライン併用）
1月 18日　　補講（オンライン）

年度内にプログラム修了に至らなかった受講者も若干名おりますが、個別の補講の実施等によって、2021年中に全員修了を予定しています。

実践講座修了者の感想

臨床宗教実践講座を修了された方々に、コロナウィルスに翻弄された一年を振り返って感想をいただきました。

コロナウィルスは禍なのか福なのか

木田　真美

全世界的に蔓延している新型コロナウイルス感染症。経済、交通、観光、イベント、ライフスタイル、仕事や勉強等々に強大な影響を与え、人間関係の変化をもたらし、差別、自死まで引き起こす、正に禍。悪のしわざなのか、巷で言われているように天が編み出した人類滅亡計画なのか。

我々3期の臨床宗教実践講座も、対面授業が1回はzoomによるオンライン、2回目は中止となった。自分は初めてzoomなるコミュニケーションツールに向かい、戸惑いはしたものの便利で移動の手間・コストも省け、今までの苦労は何だったのかと思った。またLineで仲間たちと繋がる新たな手段を得て、ちょっと進化したなとほくそ笑んだ。

中身はどうだろう。zoomは学会でも採用していて、一般的な講義や情報収集には特に問題なく、どこにいても視聴できるメリットがある。一方面談や気持ちを話す段になると、タイムラグがあり、目線や相手の反応が直に見えないこともあり本音が言えない。体温を感じない。画面で会っているにもかかわらず感情が伝わらない。臨場感がない。

LINEも言いたいことを文字にするのが大変。即座に対応できないこともある。こんな問題を抱え、やはり対面は重要だ、直に会ってこそこころに向き合えると期待しつつ、実践実習に突入。実習先は自分の勤務している病院なので、断られたり制限されることはなかった。同期の中にはそのことで苦労なさった方々もおられ、本当に大変だったと思う。しかしながら、病院での診察、検査、入院形態、面会などの方式はこれまでと一変し、コロナウィルス感染者、疑似者に対する回診、食事、守秘義務厳守などの対策が取られた。

印象的だった患者さんの事。入院中に90歳の誕生日を迎えた末期膵臓がんの女性（告知済み）。比較的元気でしっかりしていたが、徐々に疼痛、食欲不振の症状が出始め、緩和中心の医療を行っていた。仙台に住む娘さんに会いたいとなり来院して頂いたが、コンピューター画面を通しての面会。耳が遠く、画面に近づき、和らいだ表情で愛おしそうに話し、会えて良かったと感謝していた。その後病態が悪化し、意識混濁、1週間後に亡くなった。

今まで当たり前に自然に行えていたことができなくなった。自由を失い、不便さ、無念さとかストレスを感じることが多くなった。でも禍が降りかかったことで気づけたこともある。何気ないことに愛おしさありがたさを感じる。家族と面会もままならない状況で、患者さんの心をどうやって受け止めたらよいのか。患者さんや家族のために何ができるのか。力になれることは、、、と考えを巡らせるようになった。

医師になって2◎年が過ぎ、様々な経験をしそれなりのプライドを持ちここまで突き進んできた。肉親の死を乗り越え、臨床宗教師とふれあう中で、病気を診る+こころを看る重要性を実感した。そして学ぶ方法としてこの講座受講を選んだ。最初の座学はついていくのがやっと。実践になってから、これまでの医師目線を指摘され、ダメ出しをたくさんくらい、多面的な見方を教えて頂いた。同期の存在も大きかった。自分と向き合う機会を与えられ、考え方のクセ、いかに自分本位であったかを思い知らされ、そうだったのかと思うことが多々あった。そしてこのコロナ禍。見方や気持ちを転換し、他人目線で考えることで自分の世界が広がり、心が軽くなり他人の評価が好転することがあった。禍中に巻き込まれたからこそ他人を思いやること、人間関係の重要性に気づけたのかもしれない。これは福なのではないだろうか。気づきは精神の成長因子である。

世の中には想像し得ないような出来事が今後も起こりうる。考えても詮のないこと。ならば今自分ができることをしていこう。助けを求めているその人のそばで、誠の精神をもってこころに寄り添い、共に過ごせてよかったと思ってもらえるようになりたいものだ。

臨床宗教実践講座の諸先生方、SVの皆さま、スタッフの皆さま、同期の皆さま、2年間お世話になり、本当にありがとうございました。さらに精進していく所存なので、これからもよろしくお願いいたします。

永見　宏樹

2年間お世話になりました先生方、学びを共にした仲間の皆様には心より御礼を申し上げます。振り返りますと感染症の流行の中、実習を受け入れていただいた高齢者施設から延期の連絡があり、二月遅れでスタートできた後、市内で感染が広がった時期は一旦中止となりました。しかし、最後まで終えられたことは実習先の施設長さんをはじめ職員さんや利用者さんなど多くの方々のおかげであったと改めて感謝いたしているところです。

教養講座において、様々な学びの根幹にNot doing, but beingの在り方の大切さを学びましたが、先生がこの中にあえて「心を寄せて」を強調されていたことの意味を、実践講座にて実習を重ねる中で何度も自らに問いかけるものとなりました。目の前の方が何を感じておられるのか、何を求めておられるのか、また、何かをしようとしている私自身の心を研ぎ澄まして見つめ、相手の方にただ心を寄せさせていただきたいと願う現場であったと感じます。

感染症の影響でハイブリッドにて行われたスクーリングやマスクを着用しての実習はマイナスばかりでなく、当たり前に感じていたコミュニケーションの在り方を見つめ直す機会であったとも感じます。先生や仲間とともに行われた会話検討会や面接の中で、内面を見つめた際に生まれる自己への否定的な感情を少しずつ許し、素直に受け止められるように変化してきたことは、私の成長の一部分であったと振り返ります。

今後も引き続き実習先の施設、更には地元の宗教者の道友とともに活動を模索していきたいと考えています。生涯にわたっての課題になりますが、私の感情を素直に受け止め、何かしようとするのではなく、ただそこに心を寄せてその場に居させてもらうことを自らに問いかけ、また、自らの反省すべきところに気付かせていただく先生や仲間に繰り返し教えを乞い、その時一度きりの現場に誠実に関わらせていただきたいと願っています。

臨床宗教教養講座・実践講座受講を終えて

川崎磨美

私は救命センターで救急医として働いています。病気や事故による突然の死、自死、子供の死、人生の最終段階を迎えた高齢者の看取り、四肢切断や頚髄損傷といった重度の障害を負う外傷など、命の危機に瀕した様々な患者さんに出会ってきました。不安、苦しみ、悲しみ、様々な痛みを抱えた患者さんやご家族の心に寄り添える救急医になるために死生学・スピリチュアルケア・グリーフケアなどについて学びたい、その思いをしたためた教養講座受講の出願書類を郵送する前に、近所の神社で初めて合格祈願をしたのが2年前。2月、梅の花が青空に映えた季節でした。

仕事をしながらオンライン授業を受講し、レポートを提出するのはしんどい時もありましたが、医学生時代や医師人生で学んだことのなかった分野に目からうろこがボロボロ落ちて、脳が刺激される心地よさを感じました。また、正直な気持ちをレポートに書くことで今まで目をそらしてきた自分の内面に少し向き合うことができました。夏と冬のスクーリングではさまざまな背景を持った同期の仲間の価値観に触れて、自分の価値観が揺さぶられ、患者さんやご家族、スタッフに対する気持ちや言葉が少しずつ変わっていったのを実感することができました。

新型コロナウィルス感染症が流行し始め、自宅以外ではずっとマスクを着用し、手洗い・アルコール消毒・ソーシャルディスタンスの徹底、生活圏以外への外出自粛と、世界が一変してしまった1年前。救急医療の現場で患者さんやご家族を大切に想い寄り添うとはどういうことなのか、実習やグループワークを通してより実践的に考え続けていきたいと書いた実践講座受講の書類を持って、あの神社で二度目の祈願をした時も、梅の花が澄んだ空に映えていました。

実習先は自分の職場。家族の面会は制限から禁止に変わり、病院全体が新型コロナウィルスから患者さんを守るために厳戒態勢になっていく中での実習でした。患者さんやご家族のお話をゆっくり傾聴する機会は少なく、蘇生の現場、重症疾患・外傷治療、集中治療などの危機的でストレスフルな状況下、救命処置を行いながら、限られた時間の中で患者さんや家族の思いを傾聴することが多かったです。救急医としての役割（救命治療）と、これから目指すスピリチュアルケア師としての役割（心のケア）の両立ができるのか悩むこともありました。

そのような状況下で行った傾聴の会話記録の中の「私」の感情は、「疲れた」「しんどい」「泣きたい」などネガティブなものが多いことを、同期の仲間とのグループワークやスーパーバイザーとの面談の中で気づかされ、2つの大切なことを学びました。1つは、「私」を大事にすること。もう一つは、自分ひとりで何もかも背負い込まず、仲間に頼ってもいいということ。救急医療現場は日々命と向き合う、とてもストレスフルな現場で、さまざまな痛みを抱えた患者さんやご家族、そしてスタッフの心に寄り添うスピリチュアルケアが必要な場所です。まずは「私」の感情をキャッチして大事にすることで安定した心でケア対象者に寄り添い、チームの仲間とスピリチュアルケアの必要性を共有し、役割分担をしながらケアにあたる。2年間のカリキュラムを通して、救急医として私が目指すケアスタイルを見つけることができました。

今年はあの神社の梅の花がきれいに咲いた2月、2年間で学んだことを若い先生たちに伝えていきながら、救急医療現場での命との向き合い方を探求していく目標ができました。

最後に、コロナ禍の影響で離れたところからお互いに励ましあいながら頑張った同期の仲間と、私の心を少し楽にしてくれたスーパーバイザーの先生方に感謝いたします。

安井幹直

臨床宗教教養講座・実践講座を修了して、今、一番感じるのは、何かに導かれるようにしてここにいるということである。

初めてグリーフケアという言葉を知ったのは、25年以上も前のことで、当時大学院生だった小生は、ホスピスのチャプレンを目指していた同期の友人から話を聞いた。それから約20年は何もなく過ぎた。

2016年、グリーフケアのシンポジウムで通訳を急遽担当することになり、文献を読み漁った。そのことがきっかけで、グリーフケアに対する関心が徐々に高まっていった。そんな折、インターネット記事で臨床宗教師について知り、今回の講座受講に至った。

教養講座のスクーリングの初日、配られた名簿を見て驚いた。車で10分ほどの距離に住む方が載っていたからである。一般的に、同郷というのは、すぐに親しくなれるはず

であるが、私の場合、元来人見知りをする性格なので、1年目は、彼とはあまりお近づきになれずにいた。

教養講座修了後、実習先を探さなければいけなかったが、一体全体どう探せばいいのか見当もつかずにいた。そこで、勇気を出してその彼に相談した。彼はすでに近所の緩和ケア病棟に断られたことや奈良県では佐々木慈瞳さんという方が傾聴・スピリチュアルケアの現場で活躍をされていて、その方にお会いしたとのことであった。

完全に出遅れたと焦り、緩和ケア病棟のある病院や介護施設、訪問看護ステーションなど、片っ端から電話をかけまくった。そもそも病院のどの窓口に電話をすればいいのか見当もつかなかったが、もう当たって砕けるしかないと腹を決めてからは、電話することにある種の快感すら覚えた。

そのなかで、ある訪問看護ステーションから話を聞いてもいいと返事を頂いた。意気揚々と臨床宗教師・スピリチュアルケア師のことを説明したが、もっと小学生でもわかるように説明できるようにならないといけないと言われ、意気消沈して帰宅。断られるだろうと諦めていたが、意外にも引き受けて下さり、そこで実習をさせて頂くことになった。

新型コロナウィルス感染症の流行を理由に多くの施設から断られたのも事実であるが、私としては、本当にスピリチュアルケアを必要として下さる現場に巡り合える絶好の機会だったと感じている。様々な制約があったが、それ以上に、スピリチュアルケアに対して理解を示してくださるスタッフの方々に囲まれて実習ができたことは、本当に幸せなことであった。実習を終えた今も、その訪問看護ステーションで非常勤スタッフとして活動させて頂いている。

実習を終えてから、訪問看護ステーションの所長が実は佐々木慈瞳さんと懇意にされていて、臨床宗教師を志す人がいずれ訪ねてくるからよろしくとお願いされていたことを話して下さった。所長は、当初、私が佐々木さんと話をした実習生だと勘違いされ、実習を引き受けて下さったのであった。私がこの訪問看護ステーションを開拓したのだと思っていたのが、実は、同期の友のおかげだったのである。

実習先一つをとってみても、何一つ私一人で何かを成し得た訳ではない。そもそも私が今いる場所に立てているのは、四半世紀も前のことが起点となっているからだ。スピリチュアルケアとは、もしかすると、一人で何かを成す種類のものではなく、いろんな人がその時々で関わり合い、誰かがしたことで自分が助かったり、自分がしたことで未来の誰かの役に立ったり、という種類のものなのかも知れない。

その後、件の彼とは、追悼巡礼に一緒に行ったり、たまにご飯を一緒に食べに行ったりと、とても親しくして頂いている。また、25年以上も前にグリーフケアのことを私に話してくれた大学院時代の友人は、その後、博士論文を執筆することなるが、その審査をされたのが谷山先生で、先生のおかげでこの機会に改めて連絡を取ることができた。

様々な人との時間や場所を超えたつながりが、私をこの講座に導いてくれたのだ。そして、このつながりこそがこれからの私のスピリチュアルケアの原動力になると確信している。

臨床宗教実践講座を修了しての所感

増永悦子（看護師）

写真１：2020年４月19日19時頃
名古屋駅行きの列車内で筆者が撮影

「なぜ、こんな目に遭うのか…」これは臨床宗教実践講座（以下、講座）の実習を開始できない正直な気持ちだった。私は看護師である。現在は看護の単科大学で教員をしている。３月に講座受講を許可され喜んだのも束の間だった。新型コロナウィルス感染症（以下、感染症）の影響で、当初の予定施設での実習は中止になった。学生の実習も中止となり、自分の実習の中止はやむを得ないと感じた。この頃、通勤で利用するJRの車両には、私以外、誰も乗車していなかった。

写真２：2020年４月29日10時頃
名古屋駅前で筆者が撮影

通勤時の通過点の名古屋駅前は通常多くの人で混雑するが、閑散としていた。街から人も車も消えた。一体何が起こっているのか、茫然とし混乱していった。GW前には些細な事で怒りが湧き周囲の人と対立した。そのことで、またストレスを感じた。精神看護学の教員に相談すると「こんな未曽有の体験をすれば、茫然として怒りが湧くプロセスは、心が健康な証拠ですよ（笑）」と慰められた。「こんな私って、フツーなんだ」とホッとしたのを思い出す。

それでも秋頃までは、WEBによる講義・面談や同期生らとの交流で、講座で学ぶ良さを噛みしめていた。臨地での実習は全くできなかったが、友人・知人の協力を得て、代替案の実習を細々と続けていた。同期生に実習内容を話すと、「充分、実習になっているよ！電話で10分対応したのも、がめつく実習時間に換算しようね（笑）。」と言われたのが忘れられない。小さな時間の積み重ねが、申請に必要な総実習時間数に繋がっていった（と今だから思える）。10月のスクーリングでは、久しぶりに先生方や同期生と会い、各々の個性に満ち、各々の解釈で表現されたスピリチュアルワークに魅了された。限定的ながら、学生の臨地実習も例年とは異なる方法で始まった。

しかし、私の実習は開始できなかった。先生方にも勧められ、多くの人の善意と協力で、何とか実習を引き受けてくれる新規施設をみつけた。ただし、さらに感染症が拡大すれば、今年度の実習は絶望的だと不安が募った。同時に秋から開始した学生の実習は、例年とは異なる課題が噴出し、私のストレスは溜まっていった。段々と心を閉ざし、仕事以外で人と関わるのが億劫になった。着々と実習を終了する同期生たちを妬ましく思うようにもなった。「なぜ、こんな目に遭うのか…」と不条理さに憤りさえ感じた。そう思うとやりきれない気持ちにもなり、実習が開始

しないのも意味があると必死で考え続けた。スピリチュアルペインとは、不条理な体験がきっかけで生じる痛みと、身をもって実感していった。

その後、先生方から実習延期になっても良いように、次年度まで新規施設と契約したと連絡があり、安堵すると共に深い配慮を有難く思った。また新規施設の管理者は「実習目的を達成できるように、全面的な協力を惜しまない。感染症対策は十分しているので安心して来てください。」と言われた。有難さに涙が出た。「なぜ、こんな目に遭うのか…」のような拘りをもつと、負の感情に支配される自分を認識すると共に、多くの人のケアで負の感情から救われるのを実感した。

年度内の全ての業務の目途が立ち、溜まった振替休日と有休を使って実習が始まった。明日には感染症が拡大して、実習中止かもしれないと思うと、実習できることへの感謝の気持ちしかなかった。素直に、謙虚に、今日一日の実習を懸命に取り組もうと思えた。実習当初は、なまじ看護師である為、看護学の実習の様になり、スピリチュアルケア師を目指す実習とは何か手探り状態だった。しかし、毎日、実習の振り返りを記録し、それを基に話をして、段々とスピリチュアルペイン・ケアを考える実習になっていったと思う。

この実習を通して、これまでの私の狭いスピリチュアルペイン・ケアの概念は打ち砕かれていった。生老病死、生きていれば出会う様々なことが、スピリチュアルペインに繋がると実感した。実習終了後にSVの先生と面談し、今後の計画を問われた。その時、実習でお世話になった管理者やスタッフ（看護師、理学療法士、事務職員）の顔が浮かんだ。毎日のように、複雑なスピリチュアルペインをもつ人と家族にどう関わればよいか、自分のことのように心配していた。今回のご縁を大切にして、永く実習施設の皆様と関わらせていただければと思う。そして、そこでの学びを、さらに、看護教育や研究に生かしていきたいと考える。

江尻徹誠

北海道旭川市出身、浄土真宗本願寺派の僧侶・江尻徹誠(えじりてつじょう)です。このたび実践講座をなんとか無事に終えることができ、ともかくほっとしております。

諸先生に賜りました厳しくもあたたかいご指導に心から感謝申し上げます。

この一年、折からのコロナウィルスの流行で私達を取り巻く環境は激変しましたが、教養講座で苦戦したオンラインでの受講が、まさか日本中の大学での標準的な受講法になるとは思いもよりませんでした。

そんな中で始まった実践講座でしたが、先生たちがギリギリまで検討を続けてくださったおかげで、茂庭荘での伝統の合宿も経験することが叶いました。講習の合間にはみんなで持ち寄った全国各地の名物に舌鼓を打ち、豪華なお食事で英気を養い、夜には最もみそっかすである私の部屋を会場として、マスク着用の上で様々なことを語りあったり指導していただいたりしました。

ある合宿の晩、不意に大村先生の眷属（指導学生さん）にラブリーエンジェルが降臨して、カードを用いた恋の放課後スピリチュアルワークが始まったのですが、その場で、同期唯一の九州男児である赤星君が「あるんよ」と結婚を決意したときには騒然としました。明くる日に私が担当したスピリチュアルワークでは「本当は怖い？赤い糸の伝説」という拙い話を披露して運命の赤い糸をお配りしましたが、果たして効果はあったのでしょうか…？あの晩、赤星君が彼女にかけられなかった電話はどんなドラマを生んだのでしょうか…？

また、茂庭荘のコンパクトでキュートな露天風呂に原先生・大村先生を含めた有志6名で芋洗いのように浸かったのもいい思い出です。密とは何か？ソーシャルディスタンスとは何か？をあらためて問いなおす合宿だったのかも知れません。

さておきまして、実習を始めるにあたっては、医療・福祉関係の施設で外部からの人間の出入を規制するうごきが強まる中でしたが、もがきながらも受け入れ先を模索するうちに、私たちはどのような分野で必要とされていて、どのように関わっていけるのかということについて考えるようになり、やがて、今だからこそ私たちとの関わりを求めてくださっている方たちがいらっしゃるのだということをはっきりと自覚することができました。

最終的に私は地元の病院の緩和病棟にうかがうことになりました。コロナ禍にあっても細心の注意をはらってご家族の面会を実施し、規模を縮小しながらも音楽療法や院内行事を開催して患者さんのQOL向上をはかってくださる尊い現場だったのですが、その病院で大規模なクラスタが発生してしまいました。実習生である私は病院の服務規定により院外からの関わりを続けることになったのですが、そこで谷山先生や悦堂先生・森田先生にいただいた問題提起やご指摘を思い出しながらがむしゃらに傾聴を続けるうちに、患者さんだけではなくそのご家族や、病院のスタッフの皆さんがコロナウィルスの影響によって抱えてしまっていたさまざまな悲嘆にも気づかせていただけました。

コロナ禍という未曾有の環境下で実践講座の教えを受け、医療機関の大変なお取りはからいによって実習を受けさせていただけたことは、この上ない貴重な経験として我が身の血肉になったように感じています。ケアについては終わりのない試行錯誤が続くものと考えていますが、果てなき学びの機会をいただけたものだと嬉しく感じております。

有り難いことなのですが、今後は実習先の病院で正式なスタッフとして地域の医療に関わっていくことになりました。また、この2年間では到底学び足りなかった原先生のウィットに富んだ振る舞いをぬすみとるべく、大学院生として死生学・実践宗教学専攻分野で修行を積んでまいりますので、諸先生・諸先輩の皆様におかれましては今後ともなにとぞご指導賜りますよう、伏してお願い申し上げます。

染谷　典秀

茂庭荘の“カビ御殿”の部屋に足を踏み入れた時、鼻をつくその匂いに、大学の寮が思いだされました。一日が、点呼で始まり点呼で終わるといった、禅宗の修行をベースにした厳しい寮の生活でした。匂いばかりでなく、部屋の壁やサッシの銀色の枠までが同じようだったので、軽い動悸・息切れ・めまいがしてきたのを覚えています。

新型コロナウイルスの影響で5回のスクーリングのうち2回がオンラインになりました。遠く離れていても、アクセスすれば瞬時に一堂に会することのできるリモートの良さは承知していても、匂いやその場の空気で感情が動くといったことは、リモートにはない対面ならではのことだと思います。

思えば、会話記録検討も個人面談もケアスタイル面接も、すべてカビ御殿の部屋で行われました。おかげで、大学の寮のイメージは上書きされましたが、将来再びカビ御殿を訪れたとして、その時にはたして、動悸・息切れ・めまいがしてくるかどうか…。

自分の内面特に感情に気づくという実習は、精神的にとても厳しいものでした。地下水脈のように、感情がそこにあることはわかっているけれど、いつもは思考の蓋をして、直接感じないようにしているから、それに触れた時は、水脈を掘り当て強烈に噴き出した水に打たれるような、痛みにも似た感覚をおぼえました。一方で、潜んでいた水脈の水が噴き出し、内部の圧が下がったような解放感もありました。ワークを終える度に、熱く強烈なシャワーを浴びたあとのような、ものすごい疲れを感じながら、同時にさっぱりとした感覚があったのは、その故でしょうか。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、実習先として当初考えていた地元の病院の緩和ケア病棟から断りの返事があり、保護司の先輩が施設長をつとめる高齢者施設にお願いしたのですが、近隣の高齢者施設でのクラスターが頻発する時期と重なり、返事がなかなかもらえず、実習が開始できたのが、7月下旬でした。

その間、さまざまな感情を味わいました。不安、焦り、早期に実習を始めることができた同期への羨望、返事がなかなかもらえなかった時に、保護司の先輩に対して抱いた事情を考えない手前勝手な怒りの感情、実習が決まった時の安堵の気持ち、それまで感じていた怒りはどこへいったやら一転して抱いた先輩への感謝の思い、まだ実習先の決まっていない同期への後ろめたさと、同時に感じたちょっとした優越感。振り返って考えれば、この期間もまた、実習であったのだと感じています。

こうした濃密な時間・空間でともに学んだ同期の仲間は、私にとってとても大きな出会いとなっています。精神的・内面的なことを、素直に語ることのできる得がたい存在です。

そんな同期の仲間とのつながり、先輩臨床宗教師・スピリチュアルケア師の皆さんとのつながりを大切にしながら、SVの先生方から頂いた言葉や、共に過ごした時間を胸に置きつつ、これからいろいろな活動をできたらと考えています。まずは、当初断りの返事のあった地元の緩和ケア病棟に再度依頼をかけるところから始めたいと思っています。

実践講座を終えて

竹林真悟

仏壇のない家で育った私が、生僧侶を見たのは、小学校2年生の時、当時三十代の両親が必死になって建てた、マイホームの棟上げ式の折でした。

理由はわからないのですが神主さんが苦手という、母の極めて一方的かつ勝手な主張で、伯母の家に来ていた浄土宗の住職さんを呼んだのでした。

その次に出会った生僧侶は、夏休みを過ごしていた母方の祖父母の家に来た日蓮宗の住職さんです。

さて、就職してしばらくして、母校の大学から開校記念の冊子が送られてきました。冊子の最後の方には、卒業生の就職先の業種別一覧のページがあります。様々な業種の中、一番最後の「その他」の欄の中に、ひときわ小さな行があり、「僧侶…２人」と記録されていました。１人が私、もう1人が卒業式の日に袈裟をつけて出席していた同じ学年の人です。彼が私が出遇った３人目の生僧侶です。

就職氷河期真っただ中の同じ年に、僧侶２人を輩出した、ユニークな経済大学が母校です。

大学を卒業して、１年間仏教を学んでから縁あって寺務員になります。上司も同僚も僧侶ばかり。職場結婚をした妻も僧侶。妻の実家のお寺に帰っても僧侶がいます。

ひと頃、世界中でFacebookが流行しました。私も例にもれずアカウントを作って、色んな人と交流を楽しんでいました。だけどある日気づいてしまいました。世界中にこんなに人がいるのに、登録されている友達の９割以上が僧侶だという事実にです。Facebookを削除して、関心を外に向けるようになりました。僧侶界からの家出です。

視界に飛び込んできたのは、礼拝施設から飛び出して、被災地で活動している宗教者。内に秘めていた宗教者のはしくれとしての小さなプライドが疼きました。それから10年近く経って、やっと臨床宗教師の学びの一歩を踏み出せました。

実習の数カ月前、ある先輩が「実習先を見つけるのに苦労するよ」と教えてくれました。先輩は続けます。「明年度予算や事業が決定する前に行動した方がいいよ」。

私は焦る気持ちをおさえ、年明け早々から近くの病院へ実習受入れのお願いに伺いました。ところがもう翌日には断りの連絡が入ります。「あーこれ、まったく検討してもらってないな」と落ち込みました。すぐに心を奮い立たせて他の病院にお願いに伺います。その病院からも、即刻断られました。僧侶でありながら僧侶不信の私は「僧侶だから断られたんだ」と、自分自身を安全地帯に入れて守るのが精一杯でした。

その後同期の方のご紹介でご縁をいただいた病院で、コロナ禍の中にもかかわらず実習を終えることができました。

患者さんは、僧侶の私ではなく、僧侶を含めた生私と接してくれます。私も病苦を抱く生誰々さんを見るよう心がけています。実習を受け入れてくださった病院の待合室で、このケアが社会的信用を得てゆくこと、他の病院でも、このケアを取り入れて広まってゆくことを祈りながら、薬の効かない心の痛みに心を傾け、心から頷く日々を重ねています。

実践講座を修了して

赤星　大道

臨床宗教実践講座を修了して今感じることは、ありきたりではありますが、１年間を通して本当に多くの方に助けられ、多くの学びを得ることができたということです。

新型コロナウイルスの影響により、当初実習を予定していた病院から受け入れを見送られ、いくつかの病院を当たるもどこからも良い返事はいただけず、私自身は6月頃から半ば諦めモードに入っていました。スクーリングもオンラインになり、同期の皆さんと直接会うこともできず、モチベーションは決して高いとは言えない状況が続きました。

そんな中、９月中旬に同期の方の仲介によって受け入れをしてくださる介護施設が見つかり、規定の実習時間を終わらせることができました。また10月以降はスクーリングで仙台に行くこともでき、何とか修了にこぎつけることができました。

同期の皆さんには、月に１回のオンラインでの現状報告会で情報を共有し、時には個人的な悩みなどを聞いてもらうこともありました。SVの先生方にも会話記録や実習で自分の中に出てきた、うまく言葉に表現できない「モヤっと感」や課題を明確にしていただき、短い実習期間の中でも自分自身の変化を感じることができました。

今後は近くにいらっしゃる臨床宗教師の先輩と共に、緩和ケア病棟での傾聴ボランティアや、地域の宗教者と医療・介護従事者をつなげていく勉強会などに参加していく予定です。新型コロナウイルスの影響もあって思うようには進めないかもしれませんが、できることからコツコツと少しずつ活動していけたらと考えています。

最後になりますが、教養講座も含めての２年間、本当にお世話になりました。東北大学という場で学べたこと、そして受講しなければ出会うことのなかったSVの先生方や同期の皆さんとの出会いは私の大きな財産となりました。1つだけ思い残すことがあるとすれば、スクーリング内で予定されていた震災の聖地巡礼に行けなかったことが本当に残念でした。この状況が落ち着いたらぜひ、同期の皆さんと行きたいなと勝手に思っています。

２年間本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

小滝君枝

現在も続いているコロナ禍では、当院でも病棟編成により、コロナ病棟ができています。そのため、今まで経験しなかった領域を学習しなければならなかったことや仕事量の増大などスタッフ皆がストレスフルな状況でした。そこは現在でも変わりません。入院患者さんは、家族との面会を長期間絶たれてしまい、心の支えがもぎ取られ、苦悩が深くなっているように感じます。これからもこの状態が続くようであれば、お部屋でのビデオ通話が出来るよう、又面会の工夫も積極的に行っていきたいと考えています。実践講座で学んだことは、今後も思考のベースになっていくと思いますし、臨床や地域での活動に役立てたいと考えています。御指導ありがとうございました。

西田智洋

昨年度、教養講座を終えた頃から、新型コロナウイルスの影響により、日常生活に様々な制限があり、緊急事態宣言以後、行事や活動も困難な状況に陥りました。その中で、実践講座の実習先の確保や、スクーリングの開催も不透明な状況でのスタートとなりました。

日々、感染状況に意識が向いて、苦悩や悲嘆を抱える人に寄り添うどころか、私自身が不安で不安定な心で過ごしていた時期がありました。しかし、実習先での活動やスクーリングでの学び、SVとの面談を通して、困難な状況に陥っても、苦悩や悲嘆を抱える人は変わらずいること、困難な状況だからこそ出来ることがあるのでは、と考えられるようになりました。また、講座で学んだ自身の内面の見つめ、課題に向き合うことの大切さを忘れずに、これから先、講座で2年間学んだことを活かしていきたいと思います。

今後は、実習先での、認知症カフェでの活動や傾聴カフェの開催を予定しています。

最後に、無事に講座を修了出来たのは、仲間(同期)の存在が大きかったと思います。この素晴らしい出会いに、本当に感謝しています。お世話になりました先生方、同期生、実習先の皆様、本当にありがとうございました。

宮澤清志（キリスト教会牧師）

教養講座では第二期で受講しました。しかし、実習の都合がつかずに一年間調整をし、実践講座では第三期の仲間たちとともに受講しました。

実践講座ではいくつかの壁にぶち当たりました。まず、コロナウイルス感染症、という「壁」です。年度当初より、緊急事態宣言下にあり、スクーリングのスケジュールや実習のスケジュールなど、様々なスケジュール調整に追われてしまい、なかなか当初描いていた形での実習やスクーリングではなくなりましたが、そこで焦ってみてもしょうがありません。目の前の様々な課題や調整にゆだねることにしました。結果的には様々な調整もつき、何とか無事に講座を終えることができました。

次にぶつかりました壁は、初めての「実習」という壁でしょうか。実習先は複合施設で、児童等放課後デイサービスでした。中には様々なハンディを抱えている児童生徒もおり、医療的ケアを必要とする子どもたちも少なくありません。そのような人々や職員の方々と、どのようにコミュニケーションをとり、コロナ禍の施設で最大限の注意を払いながら実習を続けていったらいいのか、戸惑いばかりでした。そこでは自らの持つ内面の課題とも否応なくぶつかっていくことになりました。実際、私は内面の感情を表に出すことが必ずしも得意ではありません。むしろ今まで感情的な部分は表に出さないように生きてきましたので、自らの感情に気づくこと、そしてそれを的確に表に出すことがいかに難しいか、そしてそのことが相手の感情に気づき、それを的確にケアする鍵であることも実践を通して気づかされてきました。自らの壁についてはいまだに大きな壁として乗り越えなければならない課題なのでしょう。

しかし、そのような壁を何とか当たって行くことができたのは、同じく講座を受講してきた仲間たちであり、また応援してくださった先生方のおかげであろうと思います。志を同じくした仲間たちの支えは何にもまさる励ましとなりました。

これからは、この講座で気づかされたことを生かしつつ、更なる研鑽に努めていきたいと願っています。

山名田紹山（臨済宗建長寺派禅居院住職）

この二年間の学びを振り返って、まずは先生方・スタッフの皆様、そして実習先の患者さん・ご家族・スタッフの皆様、またとりわけ、ご縁あって共に学ばせて頂いた受講生の皆様に、心からの感謝を申し上げます。本当に有難うございました。とても濃密な時間でした。特に実践講座の一年間は、中々に猛烈な時間で、思えばなんだかワクワクするようです。

想像もしなかったコロナ禍という事態は、実習先の確保や実際の実習開始に漕ぎ着けるまでに、少なからぬ不安と焦りの負荷をかけてくれました。その忍耐の期間があったせいか、実習に挑む私のテンションは更に高められたのだと思います。おかげで満を持して、意欲と緊張の塊となって臨んだ病院での実習では、素直に良く失敗することが出来ました。というか、目論見をしっかり裏切られることが出来たと自負しております。

自己の無意味さと無力さに、毎回、這う這うの体となりながら、それでもそこに居る。そこに居させてくれる患者さんやご家族の言葉や表情・仕草に圧倒される自分を、腰を据えて、見る。そんな内面の動揺を時に機敏に察知して掛けて下さるスタッフの声に、自分自身との距離感を取り戻す。そして会話記録の作成や検討会、スーパーヴァイザーとの面談を通して、あらためてその距離感を図り直し、自己課題とその取り組みについて推敲し直して行く。実践講座の醍醐味であったかなと思います。またこの一年の講座を通して私がたどり着いた目下の課題も、やはり私の予想を裏切って、思いのほか素直な、シンプルな形で浮かび上がったものでした。加圧と研磨を経て腑に落ちる自己課題を得たことは、苦しくも実に喜ばしいことで、これからも丁寧に取り組んで、精錬して行きたいと考えています。

現在は実習を通してご縁を得た、別の診療所で活動させて頂いております。病院と在宅と、患者さん・ご家族それぞれにとって、どのような違いがあるのか無いのか、感じ、学びながら、コロナ対応の制限もあって病院実習では殆んど経験しなかった、看取り後のご家族と接する機会が増えました。グリーフケアとして、内奥の声に触れさせて頂くと同時に、人間として、僧侶として、足許から、自己の死生観や宗教実践を問い直し、更新する契機を頂いていると感じます。様々なご縁を大切にしながら、地域の多職種・諸機関と連携を図りつつ、現場に関わり続けたいと考えています。

各地の動き

臨床宗教師会の活動報告

各地臨床宗教師会の基本情報と活動の概要を掲載します。掲載項目は次の通りです。
(1)役職者、(2)会員数、(3)認定臨床宗教師数、(4)活動の概要

北海道臨床宗教師会

時折、雪も降ることがありますが、ようやく北海道も春の訪れを感じるようになりました。ふきのとうや行者にんにくなどの春の山菜も目にするようになりました。

今年度は、4月24日の研修会、5月1日の総会を皮切りに、研修と交流の機会を増やす計画をしております。巷では、新コロナの変異株の話題もあり、収束の見通しもつきませんが、会の活動も春を迎える草木のように時がきたら芽吹くように、出来ることを出来るだけ、黙々と備えていく所存でおります。

また、会員各位も個人では、地道な実践を変わることなく続けております。互いの安否に気づかいながら、広い北海道の地で活動を続けて行けるように願っております。

(1)代表・小林茂　世話人・足立隆厳　事務局・眞如晃人　監査・米本智泉
(2)会員数・9名 (2021年3月現在)
(3)認定臨床宗教師数・5名
(4)今後の予定
四月末にFU研修、五月頭に総会を実施し、その後は定期的な研修を主としてオンラインで実施していく予定です。

東北臨床宗教師会

新型コロナウィルス感染症のまん延による世界的な苦悩と混乱のなかで、当会においても多くの活動が制限されることとなりました。対面で行ってきた役員会や研修会などはオンライン開催となり、東日本大震災被災地におけるカフェデモンクも長期間の開催中止を余儀なくされました。

そのような状況にあって、オンラインツールのメリット・デメリットを学び、会議や研修会の新しい開催スタイルの可能性を模索出来たことや、感染対策のもとで電話相談活動を続けコロナ禍の悩みの受け皿としても機能したことなどは今後に向けた希望と感じられます。

令和3年3月11日、東日本大震災発生から10年となりました。10年前、あの日の絶望と嘆きのなかから、臨床宗教師は歩み出しました。当会では金田会長を中心に、3月9日に東日本大震災10年慰霊行脚を南三陸で、3月11日にカフェデモンクを石巻で開催致しました。当日は全国から臨床宗教師会の仲間が、皆、ＰＣＲ検査を受け陰性を確認したうえでお集まり下さいました。これからの臨床宗教師の在り方を考えるうえでも、臨床宗教師の原点を確認する行脚とカフェデモンクは意義深いものとなりました。

(1)役職者
○会長：金田諦應
○副会長：松谷寛元、宮崎正美、佐藤恵子
○理事：小山田和正、三浦賢翁、渋谷真之、李明信、奥原幹雄、及川寿美子、阿部頌栄、松山宏佑、田中嘉章、新田忍澄
○監事：吉田俊英、氏家栄宏
○事務局
・事務局長：高橋悦堂　・事務局次長：渋谷真之
・庶務：及川寿美子、松山宏成
・会計：吉田彦英、浅野志保
○顧問：鈴木岩弓
○カフェデモンク事業委員
・委員長：金田諦應　・副委員長：吉田裕昭　・委員：新田忍澄
○「宗教者による電話相談」事業委員
・委員長：松山宏佑　・副委員長：高橋悦堂　・委員：坂本顕一、斎藤永子
○広報事業委員
・委員長：三浦正惠　・副委員長：奥原幹雄
○研修事業委員
・委員長：吉田俊英　・副委員長：金田諦晃　・委員：小山田和正、妻鳥紘明
○岡部医院連携事業調整担当：吉田彦英
○倫理委員
・委員長：古林俊晃　・倫理委員：吉田裕昭、細谷朋子
(2)会員数55名（正会員54名、準会員1名　2021年3月31日現在）
(3)認定臨床宗教師数28名（2021年3月31日現在）
(4)活動状況（2019年10月～2021年3月）
○東日本大震災１０年慰霊行脚
・2021年3月9日　南三陸町　海蔵寺～旧防災庁舎
○カフェデモンク
・2019年11月21日　石巻市新渡波復興住宅
・2020年2月13日　石巻市新前沼西復興住宅
・2020年11月4日　石巻市新蛇田第一集会所
・2021年3月11日　石巻市新蛇田第一集会所
○「宗教者による電話相談」
・毎月第2、第4水曜日15時～21時　0120-783-643
・2020年10月27日　電話相談担当員による勉強会

○東北臨床宗教師会ＨＰ運営
https://www.ht-rinshu.com/

○研修事業
2019年
・11月14～15日　【ＦＵ研修】
【ＳＣに関する講義】（一般公開講義）
講師：窪寺俊之氏　演題：「傾聴の癒し―スピリチュアルケアの本質とは何か―」
【会話記録検討会】　ＳＶ：大村哲夫氏、谷山洋三氏、高橋悦堂氏
【活動記録検討会】　SV：金田諦應氏、高橋悦堂氏
・12月3日　第108回 宗教学研究会　（東北大学実践宗教学寄附講座と共催）
【ＳＣに関する講義】
講師：岡田圭氏　演題：「鎮魂ケア：スピリチュアルケアの実践と展開」
2020年
・1月31日　【会話記録検討会】　ＳＶ：髙橋悦堂氏
・7月11日　【ＳＣに関する講義】　＊オンライン開催
講師：鈴木岩弓氏「イエ亡き時代の死者のゆくえ」
・9月6日　【SCに関する講義】　＊オンライン併用
読書会形式の演習
教材：藤山みどり著『臨床宗教師―死の伴走者』　高文研、2020
指導：髙橋原氏
・11月25日【FU研修】　＊オンライン併用
【会話記録検討会】　ＳＶ：谷山洋三氏、髙橋悦堂氏
【活動記録検討会】　ＳＶ：金田諦應氏、髙橋悦堂氏
【倫理講義等】　講師：大村哲夫氏　＊オンデマンド配信
2021年
・2月18日　【ＳＣに関する講義】（一般公開講義）　＊オンライン開催
講師：蝦名裕一氏　（東北大学災害科学国際研究所災害文化研究分野准教授）
演題：「先人の疫病文化に学ぶ」

○医療機関などからの活動依頼を受けて会員を紹介
・医療法人爽秋会　岡部医院・岡部医院仙台
・宮城県立がんセンター
・岩手県立中部病院
・岩手県盛岡少年院
・医療法人松田会　松田病院

○取材
・2019年10月 神戸新聞社
・2020年11月 ＮＨＫてれまさむね（電話相談事業）
・2020年11月 ＮＨＫＷＯＲＬＤ　（電話相談事業）
・2020年11月 朝日新聞ＧＬＯＢＥ（カフェデモンク事業）
・2021年3月　河北新報社　（電話相談事業）
・2021年3月　河北新報社　（東日本大震災10年追悼行脚）

関東臨床宗教師会

(1)代表：井川裕覚　副代表：木村雅恵・堀口哲哉
事務局長：田中杏珠　事務局員：鈴木智雄・三善恭子　会計：千田明寛
理事：大島慎也・田中靖隆　監事：高橋一晃・西郊良俊
倫理委員長：中村博武　顧問：島薗進・伊藤文雄
相談役：伊藤高章・葛西賢太・小西達也・曽根宣雄・森田敬史（順不同、敬称略）
(2)会員数　正会員 69名　准会員 10名　賛助会員 2名
(3)認定臨床宗教師数 58名
(4)活動状況
・総会：6月19日～29日　会員メーリングリストにより開催
・FU研修
①第11回FU研修　6月17日
会話記録検討会@Zoom　SV：大村哲夫先生（東北大学）
6月24日～30日　倫理講習@オンデマンド　講師：大村哲夫先生
②第12回FU研修　11月19日@Zoom
講師：田中善啓先生（田中医院、在宅医、浄土宗僧侶）山内志保先生（自由が丘カウンセリングオフィス、臨床心理士、公認心理師）、井口真紀子先生（在宅医、「感染症と闘う医療介護従事者の話を聴く会」代表）
③第13回FU研修　2月26日@Zoom
会話記録SV：打本弘祐先生（龍谷大学）
講義「人々の『ニーズ』にいかに応えるか」　講師：西村和江先生（救世軍医療部チャプレン）

中部臨床宗教師会

昨年は、新型コロナウィルス感染症の影響により予定されていた研修会が一部中止となるなど、従来とは違った対応を求められることとなりました。役員会でも協議を重ねzoomでのオンライン研修を導入し、試行錯誤の段階ではありますが、オンラインでの研修を3回開催することができました。今年も先行きが見えない為、研修会は全てオンラインで実施することになります。
また、会員への聞き取りアンケート調査を行ったところ、研修会の回数を増やして欲しいとの要望を多数お聞きし、4月以降から毎月研修会（FU研修・勉強会）を行うこととなりました。コロナ渦ではありますが、今年も研修会を中心に中部臨床宗教師会の活動を積極的に続けて参ります。
(1)役員
会長：武藤隆広
副会長：引田弘道　松本峰哲
事務局長：田中至道
会　計：服部あずさ
役　員：坂野大徹　北原密蓮
監　事：倉田恒雄　不破英明
倫理委員長：森田恭一郎
顧　問：沼口　諭　大下大圓
事務局員　岩井浩子

(2)会員49名　正会員:48名 准会員:1名
(3)認定臨床宗教師:29名
(4)活動の概要〈2020年度〉
*フォローアップ研修会
第25回　大村哲夫先生
第26回　黒川雅代子先生/森田敬史先生
第27回　申英子先生
＊カフェデモンク
・カフェデモンク水都おおがき（岐阜県大垣市）
開催日：祝日を除く毎週月・水・金曜日の午後1時30分～午後4時　月/11～12回開催
参加スタッフ：2～6名
令和2年2月下旬より外部の方を対象としたカフェ活動を中止し、アミターバ入居者様を対象とした活動に重点を置くこととなった。
・カフェデモンクなごやか（愛知県名古屋市）
開催日：午後2時～午後4時　第3日曜日
参加スタッフ:3人（臨床宗教師2人、スピリチュアルケア師1人）
　名古屋のグリーフケアの有志とチラシやホームページにて、連携関係を持ち、訪れる参加者さんが他にも選んで参加できる居場所を複数持てるよう紹介しあっている。今年度も感染状況を見ながらオンラインと対面で開催予定。
・Mie de Monk（三重県松阪市）
(活動日時)
奇数月 第４木曜日　午後6時～午後8時
偶数月 第４土曜日 午後2時～午後4時
開催場所：松阪市中町1978　養泉寺
参加スタッフ：3名(内１名は、次回資格認定予定者)、平均参加者数 4～5名
・グリーフカフェ　さえずりの杜
開催日時：毎月第3金曜日　午後1時30分～午後3時30分
開催場所：名鉄知多半田駅前
　　クラシティ3階　活動ルーム
HP: https://saezurinomori383.amebaownd.com

〈2021年度〉
・FU研修会
第28回　谷山洋三先生：5月23日（日）
第29回　大村哲夫先生：8月7日（土）
第30回　大下大圓先生：10月13日（水）
第31回　松本峰哲先生：12月11日（土）
・勉強会
第1回　谷山洋三先生：4月3日（土）
第2回　高橋悦堂先生：6月18日（金）
第3回　森田敬史先生：7月16日（金）
第4回　森田敬史先生：9月13日（月）
第5回　大下大圓先生：11月10日（水）
※いずれもオンラインでの開催

関西臨床宗教師会

　ただじっと息をひそめて堪えているだけの2020年春を送った後、手探りながらもzoom会議を始めオンラインでの研修や活動という新しい道が開けました。所属会員の協力を得られ、事業を大きく後退や停滞させることなく展開でき心から安堵しました。オンラインでの活動は時間や交通費の節約といった効用も生みますが、やはり対面に勝るものはないということも再認識されました。これからも柔軟に上手に使い分けて運営や活動を継続させていきたいと思います。今年度もまた会員に活動や研修の「場と機会」を提供することがまずは第一と考え、数の実績を求めずに様々な事業を無理せずに進めていく所存です。更なる学びを忘れずに自己研鑽に励み、社会への更なる一歩を踏み出せる一年になれるよう、邁進したく存じます。

(1)会長:野々目月泉、副会長:吉本清信、事務局長:上原慎勢、会計・名簿管理:吉本清信
理事:石原真・打本弘祐・大河内大博・南部松見・花岡尚樹・森田敬史、　相談役:鍋島直樹・黒川雅代子・杉岡孝紀・森崎雅好　監事:吉田敬一、森本勇
会則委員会:吉本清信(委員長)、研修委員会:花岡尚樹(委員長)・牛田匡・野々目月泉、社会活動委員会:南部松見(委員長)・高橋一天・三谷靖法・渡辺昧比・上原慎勢、事務局:上原慎勢(局長)・安井幹直
倫理委員会:森田敬史(委員長)、申英子、西岡秀爾
日本臨床宗教師会派遣理事:野々目月泉
(2)会員数　正会員56名、准会員1名(4/14現在)
(3)認定臨床宗教師数 40名
(4)- 1活動概要(2020年度)
◎事務局(特記がないものはオンライン開催)
・総会:5/15～29メール及び一部郵送、臨時総会:12/21～2021/1/25メール及び一部郵送
役員会:4/23・7/8・12/ 9 、執行部会:7回開催、その他打ち合わせなど多数
・新年会: 2021/1/25参加13名
・当会HP及びFBの開設、更新、管理
・活動内容報告書取りまとめ
・諸団体や個人からの問い合わせ対応
・その他: 12/17龍谷大学シンポジウム、2021/3/6滋賀県死生懇話会案内

◎研修(オンライン開催)
・スピリチュアルケア講義:6/4金田諦應師「臨床宗教師のメタスキル」参加25名
・第4回活動内容検討会&第11回会話記録検討会:9/28参加8名(SV1含)、打本SV
・第6回FU研修:11/2参加21名、倫理講習大村哲夫先生「今、臨床宗教師の倫理を考える」、活動内容提出1・会話記録提出3、森田SV・申SV
・第5回活動内容検討会:2021/1/25　参加14名、活動内容提出1名、森田SV
◎社会活動
・「カフェデモンク」FB開設
・京都随心院リアルカフェデモンク:10/13、来場13名、活動9名

・zoom　カフェデモンクin　関西:5/27・6/25・7/23・10/22・11/26・12/17・2021/1/28・2/25・3/25、第4木曜20:00〜21:30オンラインで開催、来場1〜12名で計延38名、活動7〜16名で計延98名
・zoomカフェデモンクfor　you:10/28傾聴対象者1名、活動3名(内1zoom管理)
・コロナ禍のカフェデモンクについての新聞掲載など:7/15朝日新聞夕刊・11/11朝日新聞夕刊、NHK「ニュースほっと関西」臨床宗教師森田敬史師の活動紹介でzoom カフェデモンクの様子放映
(4)-2活動予定(2021年度)
◎事務局
・総会/役員会/運営委員会/執行部会などの開催
・新年会
・活動報告書取りまとめ
・HP/FBの更新と管理
・団体や個人からの傾聴依頼や問い合わせに対応
◎研修
・FU研修会: ①6/9オンライン開催、倫理講習/会話記録検討会/活動内容検討会　、②11/3対面(本願寺聞法開館)、倫理講習、会話記録検討会/活動内容検討会
・府県別対面会話記録/活動内容検討会:　5/10奈良、8/25大阪南部、9/6大阪北部、10/28兵庫、12/6京都&滋賀、2/8和歌山
・オンラインスピリチュアルケアに関する連続講義:5/31「内観基本講座」吉本清信先生、7/6「スピリチュアルケアとは」柏木哲夫先生、8/23「人生の危機とスピリチュアルケア」窪寺俊之先生、9/13「現代社会とスピリチュアルケア」高木慶子先生、10/6「臨床宗教師とスピリチュアルケア」大下大圓先生、12/15「現代日本の宗教とスピリチュアルケア」島薗進先生、1/19「精神疾患とスピリチュアルケア」申英子先生　計7回
・活動内容検討会:新年会に併せて開催
◎社会活動
・主催カフェデモンク: ①対面形式5/11京都随心院、秋季詳細未定　②zoom形式毎月第4木曜日20:00〜21:30　③for you 随時　④奈良カフェデモンク、大阪カフェデモンク
・京都府訪問看護ステーション協議会との連携活動
・佛・看連携研究会への後援
・一般からの問い合わせ対応
・ビハーラ本願寺「お坊さんカフェ」協賛、城陽福祉ふれあい祭り「きょうのモンク」、「閻魔堂カフェデモンク」支援

中国地方臨床宗教師会

⑴代表　桝野統胤、副代表　堀靖史、会計　松本宜隆
庶務　和田隆恩、事務局　朋澤融智
⑵会員数　16名
⑶認定臨床宗教師数　11名
⑷活動状況
今年１年は研修を行うことが１度もできなかった。被災地（倉敷市真備町）でのカフェデモンクは昨年休止してから現在も休止中。現地とは連絡を撮り続けている状況。会としての活動は、オンラインを使用した近況報告会のみ。
四国との合同研修会などを企画中。

四国臨床宗教師会

(1)代表:童銅啓純、副代表:岩佐隆昇、事務局:南千代、会計:田野妙秀
(2)会員数 6名
(3)認定臨床宗教師数 5名
(4)各会員の活動は感染症のため休止状態である。
活動はFU研修会（対面）の計画は2回あったが感染症が影響して実現しなかった。会として中国地方との連携を考えて中国地方と四国との交流をZoomで行った、当方からは3名の参加があり、小さな活動だが久しぶりに会う会員との会話は楽しかった。
今後は会員の更新に向けて、個々の就労状態と単位取得状況を会員と共有してFU研修会を計画して行く所存です。

九州臨床宗教師会

2月中旬に総会開き2021年度体制をスタート。会員内外での連携を進める県世話人を一部増強、会員が多い福岡と熊本

を2人体制としました。1年交代輪番制の下、数カ年で全会員が社会づくりの一翼を会世話人として担う体制となりました。

(1)県世話人▽福岡　淺枝泰淳（ケア担当）入江楽（研修担当）▽佐賀　福山芳賢（ケア）▽長崎　成田慶信（研修）▽鹿児島　柴原仰栄（ケア）▽熊本　玉春なおみ（ケア）山口達也（21年代表世話人・ケア幹事）▽監査　金聖孝（19年代表世話人・熊本）▽次期（22）代表世話人（会計・研修幹事）信行一宏（福岡）▽前期（20）代表世話人　糸山公照（熊本）

(2) 正会員39人、ケア会員5人（2月総会時）

(3) 34人（3月）

(4) 20年度は九州各県で豪雨発災、熊本県南の大規模被災地では当地会員らが独自に活動したものの、コロナ禍で県外・被災地外からの支援受け入れ禁止や孟夏対応等で九州会の傾聴カフェは具体化できませんでした。研修活動も会員外連携計画は実現できませんでしたが、同年秋に東北大大学院の大村哲夫准教授を講師にＺＯＯＭにて3日間実施（倫理研修8人、会話記録4人発表16人参席、活動内容1人発表6人参席）しました。

21年は1月に長崎3会員が地元医療従事者向けＷＥＢ傾聴を会活動として実施、熊本市や八女市の病院内活動等も継続中です。次期代表世話人が会員情報等のＷＥＢ管理充実化に取り掛かり、コロナ禍での活動活性化に向けて前進させています。

日本臨床宗教師会

一般社団法人日本臨床宗教師会は、2020年～2021年に24名の認定臨床宗教師を資格認定しました。

2020年3月　13名
2020年9月　3名
2021年3月　8名

これによって認定臨床宗教師数は累計211名となりました。資格更新期限はそれぞれ5年後となります。

前年度中止された第5回日本臨床宗教師会フォローアップ研修は、2021年3月8日に、オンラインで開催されました。プログラムは次の通り。

倫理講義　大村哲夫（司会：森田敬史）
特別講義　大下大圓（司会：谷山洋三）
活動内容検討会　発表者3名
会話記録検討会　提出者6名
会話記録検討会振り返り・閉会

役員の任期満了に伴い、新たに、鎌田東二氏が会長に就任し、前会長の島薗進氏は監事に就任しました。

実践宗教学寄附講座活動報告

《2020年度開講科目 前期・後期》

「死生学：死から生を考える」「グリーフケア試論」(大村)、「宗教心理学」「スピリチュアリティと死生観」(高橋)、「死生学文献講読」(高橋・大村)、「スピリチュアルケア」「宗教的ケア」(谷山)、「死とともに生きることを学ぶ」（竹之内裕文・集中）、臨床宗教教養講座(第4期)、臨床宗教実践講座(第3期)

《論文・寄稿》

鈴木岩弓「『臨床宗教師』の展開にみる異文化理解」『多様性と異文化理解』（東北大学教養教育院叢書4）東北大学出版会、2021.03.31、pp.157-179.

Becker, C.B., Taniyama, Y., Kondo-Arita, M., Yamada, S., & Yamamoto, K., “How Grief, Funerals, and Poverty Affect Bereaved Health, Productivity, and Medical Dependance in Japan,” *OMEGA: Journal of Death and Dying*, 0(0), 2020. 8, pp. 1-21.

谷山洋三「民間信仰に根ざしたグリーフケアの可能性」『グリーフ＆ビリーブメント研究』創刊号、 2020.12、pp. 43-49.

谷山洋三・山本佳世子・森田敬史・柴田実・葛西賢太・打本弘祐「医療施設における宗教的背景と宗教家の活動形態：質問紙による実態調査」『東北宗教学』16、 2020.12、pp. 29-42.

アンディ・ホリック・ラムダニ、谷山洋三「豪州ニューサウスウェールズ州内大学におけるムスリム礼拝施設とチャプレン」『論集』（印度学宗教学会）47、2020.12.

谷山洋三（事典項目）「スピリチュアルケアと宗教的ケア」日本佛教学会編『仏教事典』丸善出版、2021.1、534-535.

谷山洋三・井川裕覚「スピリチュアルケアにおけるケア資源の活用—無力の自覚を手がかりとして—」『グリーフケア』（上智大学グリーフケア研究所）9、 2021.2、pp. 49-65.

Becker, C.B., Taniyama, Y., Kondo-Arita, M., Sasaki, N. Yamada, S., & Yamamoto, K., “Unexpected Costs of Bereavement Grief in Japan: Patterns of Increased Use of Medical, Pharmaceutical and Financial Services,” *OMEGA: Journal of Death and Dying*, 0(0), 2021.2, 1-15.

《発表・講演》

2021.03.06 鈴木岩弓「創造的復興としての『臨床宗教師』—日本宗教史の転換点—」香港公開大学主催：市民向け公開シンポジウム「大震災と復興の行方」、Zoomシンポ

2021.02.08　鈴木岩弓「イエ亡き時代の死者のゆくえ」共生・心の会講演、Zoom講演

2021.03.14　高橋原「ほぼゼロ葬：コロナ禍の状況における看取りと葬儀」日本統合医療学会北海道東北ブロック会・宮城県支部共催、オンライン

《報道の記録》

共同通信、他 (2020/5/13) 医療従事者らの癒しに動画を　宗派超えサイト開設

朝日新聞大阪夕刊 (2020/5/16) 聴くプロ、医療従事者をケア　震災で誕生の臨床宗教師ら、オンラインで

朝日新聞夕刊 (2002/5/18) 医療従事者の悩み、傾聴のプロが聞く

朝日新聞大阪夕刊 (2020/11/11) 傾聴喫茶、９カ月ぶり対面「３密」避け屋外で再開　カフェデモンク

朝日新聞グローブ (2021/1/3) ＜心のレジリエンス＞慰霊から心のケアへ、宗教の枠超え　心の再生と宗教の関わり

毎日新聞宮城 (2021/3/10) 東日本大震災：犠牲者を追悼　宗教者が行脚　南三陸

読売新聞 (2021/3/11)「未曽有」の先に（８）街へ出て、耳傾ける　宗教

エコノミスト　4694号 (2021/4/6) インタビュー：震災の地で「傾聴喫茶」＝金田諦應・曹洞宗通大寺住職

その他

寄附者

東北大学文学研究科実践宗教学寄附講座は宗教界など各方面からの寄附金によって維持運営されています。寄附者の方々をここに記し感謝申し上げます。

宗教法人中山身語正宗
日 本 基 督 教 団
南西ドイツ宣教会
(EMS: Evangelical Mission in Solidarity)
宮城県宗教法人連絡協議会
全真言宗青年連盟
日本ナザレン教団
宗教法人みんなの寺
融通念佛宗音羽山観音寺
浄土真宗本願寺派真覚寺
真宗大谷派常念寺
天台真盛宗新光寺
天台真盛宗西念寺
融通念佛宗西方寺
曹洞宗島田地蔵寺
真言宗智山派大聖寺
龍谷大学実践真宗学研究科教員有志
宗教法人孝道山本仏殿
宗教法人妙光寺
医療法人徳養会
宗教法人平間寺
日本宗教連盟
日蓮宗実相寺
日蓮宗妙興寺
清水寺
秩父神社
竹駒神社
神習教
念法眞教
日蓮宗立像寺
曹洞宗崇禅寺
聖観音宗浅草寺
日蓮宗法音寺
曹洞宗洞林寺
應典院秋田光彦
天台宗円満寺
明川寺
有限会社仏教企画
曹洞宗北海道管区
密教２１フォーラム
日蓮宗高応寺
その他の方々
公益財団法人世界宗教者平和会議(WCRP)日本委員会
立正佼成会一食平和基金
真宗教団連合
真如苑
公益財団法人 新日本宗教団体連合会
一般財団法人　ありがとうインターナショナル
日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室
財団法人東北ディアコニア
特定非営利活動法人神道国際学会
特定非営利活動法人世界開発協力機構

当講座は、全日本仏教会の「推薦団体」、日本宗教連盟の「後援団体」として認定を受けています。
ご寄附のお申し込みにつきましては下記までお問い合わせください。なお、寄附金には法人税法・所得税法による税制上の優遇措置があります。

東北大学文学研究科内実践宗教学寄附講座
TEL: 022-795-3831(FAX兼)
E-mail: j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp

編集後記

3月9日、かつて第二回臨床宗教師研修（2013年）の追悼巡礼で訪れた南三陸町の戸倉海岸を、全国から集まった宗教者たちとともに再び行脚した（皆PCR検査を済ませてきた）。金田諦應さんのインタビューにあるように、この度は整備された防波堤の上を歩くことになり、目的地の旧防災対策庁舎は、南三陸町震災復興祈念公園の一部をなすモニュメントとなっていた。下の写真は、防災対策庁舎の骨組みを見下ろす祈りの丘の頂上に設置された「名簿安置の碑」の傍らで撮影したものである。懐かしい顔にも再会し、臨床宗教師の原点を見直す一日となった。（た）

東北大学実践宗教学寄附講座ニュースレター第16号
編集・発行 東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座
2021年5月1日（第1刷）
（このニュースレターのPDF版は右記サイトから閲覧できます）

各地臨床宗教師会連絡先

北海道　h.rinsyu@gmail.com
東北　ht.rinshushikai@gmail.com
関東　kanto.rinsyo.syukyoshi@gmail.com
中部　chubu.rinsyu@gmail.com
関西　info.kansai.chaplain@gmail.com
中国地方　ch5rinshu@yahoo.co.jp
四国　p005@me.com
九州　k.rinsyu@gmail.com

日本臨床宗教師会事務局
sicj@g-mail.tohoku-university.jp

実践宗教学寄附講座

主任教授　高橋　原　（兼任：死生学・実践宗教学、宗教学）
教授　木村敏明　（兼任：宗教学）
教授　谷山洋三　（兼任：宗教学, 死生学・実践宗教学）
准教授　大村哲夫
顧問　鈴木岩弓　（兼任：教養教育院 総長特命教授）

980-8576
宮城県仙台市青葉区川内27-1
東北大学文学研究科内
実践宗教学寄附講座
022-795-3831(T/F)
j-shukyo@g-mail.tohoku-university.jp
http://www2.sal.tohoku.ac.jp/p-religion/

東北大学